

特集
チエロの
季節が
やって来た

平野玲音 平野知種

HIRANO Reine & Chigusa

「私がチエロを始めるときも、骨格がしっかりしてから始めた方がいいとアドバイスを受けたものですから」と、ご自身と同じ9歳から娘にチエロを持たせた平野知種さん。現在、新アドニス弦楽四重奏団で活躍のほか、教室で多くの生徒にも指導をしている。娘の玲音さんは、ウィーンに留学中。チエロを学びながらヨーロッパ各地の演奏会にも参加。日本でもリサイタルを開き、アルバム「レイネ・デビュー」も発表。今後の活躍が楽しみな若手チエリストだ。

玲音さんはやはりチエロを弾いてほしいと願った知種さん。だが玲音さんにとって、「チエロはまさに義務感。こんなウチに生まれてこなければよかったとも思いました(笑)」。しかし平野家はチエロだけに重きを置く英才教育ではなかった。玲音さんも普通大学を受験する一時期、チエロから離れていたのだと。そのことで逆に客観的になれ、チエロの素晴らしさも再確認。そのきっかけはテレビで見たステイヴン・イッサリスの演奏だった。「サン=サンスのチエロコンチェルトだったんです。これがチエロから離れる前に私がいやいや弾いていたあの曲なの? なんて楽しいものだったんだろう! と思ったんですね」。そして再びチエロを手にし、ついには留学の決意をするまでとなった。「その頃になりますと逆に親の方が反対し、かなりバトルがありましたね。特に父親はひとりで海外へ出るのも、音楽で一生食べて行けるのかも心配して」と知種さん。父・秀清さんはN響のチエロ奏者、人一倍音楽家の苦労も知っている。それでも知種さんは、故・徳永兼一郎氏のレッスンを受け、初めて自分で自分の音を出すという実感を持ったその経験に重ね合わせ、「娘がどうしてもやりたいと思ったとき、理解できた」と言う。

チエロという楽器に向かい、共に生きるお二人にその魅力を尋ねると、「人間の声に近い楽器だというのはよく言

われますが、自分がしゃべっているのと同じように弾けるというのがいい状態なんじゃないかと思うんです。私は人に對して優しく接したいと思っているんですけど、その気持ちに通じる柔らかい音色を楽器が持っているので、自分の好みに合っている」と玲音さん。知種さんは「少なくともやつていれば絶対に成長が望める楽器というのが魅力だと。チエロの場合は他の楽器と違い、左手を見てはいけない。そこで自分のイメージを膨らませてやらなければいけないのが初心者にとって苦痛ですよね。ですから基本的な練習のほか、半分は自分が楽しめるような練習をして、いい音色が出せることを目標にしてほしい」と、指導者として説得力のある言葉。

チエリストとして互いのよいところを、「母はチエロに向かうときも、努力を惜しまない。いい音を出したい一心というのは、私から見ても魅力的」。「娘の演奏にはあたたかさや愛情が感じられる。これからいろいろな経験をしていろいろな表現をしてほしいんですけど、今の純粋なまま、優しさはずっと持ち続けてもらいたい」と語る。

そんな仲良し親子のお二人、ライバル心はあるのだろうか?

「私はちょっとありますね。娘が留学してどんどん吸収し、成長していく姿を見ていると、うらやましいなあと。夢を託すというのもありますが、自分にはできないけれども…という、ちょっと焦りみたいなものは感じます」。

そんな知種さんの言葉を隣で聞く玲音さんは、「えー! ?」と初めての母の気持ちに驚きながら、恥ずかしそうに微笑んだ姿がとても純粋で美しかった。



HIRANO Reine

母と同じく3歳でピアノ、9歳でチエロを始める。山崎伸子、藤原真理の両氏に師事。東京大学文学部で美学芸術学を専攻し、同大大学院総合文化研究科(表象文化論コース)修士課程修了。2002年よりウィーンに留学。ウィーン・フィルのG.イーベラー氏に、室内楽をウィーン国立音楽大のM.フェルナンデス、J.マイスル両氏に師事。S.イッサリス氏、G.クルターク氏らのマスタークラスを受講。アレグロ・ヴィーオ賞、アルティス賞、ジーメンス・ウィーン古典派賞受賞。ソロ、室内楽で、ウィーンのコンツェルトハウスを始めオーストリア各地のコンサートに出演している。06年1月、ロンドン・東京でリサイタルを開くと共にCD「レイネ・デビュー」をリリースし、各新聞・雑誌で絶賛を博す。今後も日本とウィーンを往復しながらさまざまな演奏活動を続ける。

HIRANO Chigusa

3歳よりピアノを、9歳よりチエロを始める。早稲田大学理工学部を卒業後、桐朋学園大学音楽学部研究科修了。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団に3年間在団、その後ソロ活動に。新アドニス弦楽四重奏団でロックの名曲を四重奏で演奏するなど、新しい試みにチャレンジしている。またチエロの曲を中心とした「ちいさな音楽会」、室内楽曲を中心とした「おしゃれコンサート」も企画、好評を博している。学習院女子高等科非常勤講師。

愛聴盤

『Live』

ニール・シコフ ORFEO-675754629120(輸入盤)

「私が一番元気をもらえるテノール歌手が、ウィーン国立歌劇場を中心に活躍するニール・シコフ。私が好きだということもあり、娘も彼が歌うときは必ずオペラ座に聴きに行きます。初めて彼の声を聞いたときにこういうテノールがいるんだ、と衝撃でした。知的な盛り上げ方をして歌う方で、チエロでこういうアプローチをしたいと感じさせてくれました」

人に対して優しく接したい その気持ちに通じる 柔らかい音色

父、母、娘、家族3人がチエリストという平野ファミリー。

チエロを弾くこと、それは家族の会話にも似て、それぞれの声でそれぞれの伝えたいことを相手に届けること。家族の絆でもあるチエロの魅力とは? 母・知種さんと娘・玲音さんにお話をうかがった。

文/三村ゆき 写真/桃井一至

取材協力/ラベルブリュイ La belle pluie 東京都品川区上大崎2-13-38 Tel.03-3448-1122 http://www.miu-1122.co.jp

『徳永兼一郎と四大名器』

徳永兼一郎(cv) 藤井一興(pf) アボロン音楽工業 C346-2(廃盤)

「私がチエロとさらに深く向き合うきっかけとなったのが、徳永兼一郎先生との出会いです。徳永先生は独特のチエロの音を作り出す方でした。この盤も勢いが伝わってくる演奏なんです。徳永先生が亡くなってしまった今、チエロの音が生前の先生の話し声のように聞こえてくるので、いいものだなと同時に、もう生で聴くことができないという悲しい気持ちもわいてきます」

愛聴盤

シューマン:チエロのための作品全集

ステイヴン・イッサリス(vc) BMG JAPAN BVCC-31002

「イッサリスさんはたくさんCDを出していらっしゃいますが、ご本人がおっしゃるにはシューマンには一番思い入れがあるそなうんです。シューマンの演奏は研究もすごくなさっているし、表現も豊かで、聴いていてもその思い入れは伝わります。シューマンのミサ曲の一部など、あまり聴く機会のない作品も入っているので、その意味でもお薦めです」

愛聴盤

ハイドン

ウイン・ムジークフェライン弦楽四重奏団 学研プラツ PLCC-756

ムジークフェライン弦楽四重奏団のチエロ奏者は、ウイン・フィルでも活躍し、私が師事するゲルハルト・イーベラー氏。他のカルテットの演奏しているアルバムは、勉強しているという感じで聴いてしまうことが多いんですが、この一枚はそれらとは異なる感動を与えてくれます。CDでありながらライブ感が伝わり、エネルギーをもらえますね」

愛聴盤

